

小京都・中村

中村の町は、15 世紀に京都から貴族と職人が流出した後に、四国の政治経済の重要な中心地の 1 つになりました。貴族や職人たちは、当時の都である京都で暴力的な勢力争いが始まった後、四万十市に移り住みました。京都での争いは、全国的な内戦を引き起こしました。

高貴な始まり

中村と京都のつながりは、関白を務めた公卿の一条教房（1423–1480 年）が、先祖代々の所領であり、所縁のあるこの土地に戻った時に始まりました。彼は、応仁の乱（1467–1477 年）の発生後に京都を離れました。応仁の乱は、京都で権力の座にあった足利幕府の支配をめぐる暴力的な勢力争いとして始まり、内乱へと拡大しました。教房は、家臣および京都の文化とともに、中村へ移ってきました。

為松公園内の中村城跡は町を見下ろす位置にあります。中村城は、各藩に城は 1 つのみとする徳川幕府の命令により、1615 年に破壊されました。高知城が、土佐藩（現在の高知県）の権力の中心に指定されました。現在の建物は 1973 年に建てられたものであり、四万十市郷土博物館となっています。城に最も近い桜町は、かつての武家屋敷地区です。位の高い武士や公職者の屋敷跡を示す、多言語の案内板が設置されています。

京都とのつながり

中村には、祇園や東山など、古い都と同じ名前の地区もあります。京都を起源とする祭りである、7 月中旬の「大文字の送り火」の際は、十代地山に漢字の大を形どって松明が灯されます。この祭りは、先祖の魂を敬う仏教の重要な祭日であるお盆を締めくるものです。この祭りは、江戸時代（1603–1867 年）に中村で始まったと信じられており、人気のある伝統行事になりました。

藤の伝説

一條神社は一条氏を祀っており、以前一条氏の屋敷があった場所の近くに位置しています。神社の階段の左側にある大きな藤の木は、神社が建立される数百年前に、一条氏が植えたと言われています。

地元の言い伝えでは、領主の一条兼定（1543–1585 年）が中村を離れる際、自分が戻れる日まで咲かないでくれとこの藤の木に頼む詩を作ったと言われています。兼定は二度と中村に戻らず、藤の木は 300 年以上も花を咲かせませんでした。しかし、1861 年に突然再び花が咲いた時、地元の人々は一條神社の建立を決めました。

毎年 5 月の初めに藤の花が満開になると、一条氏を偲んで藤祭りが開かれます。祭りでは、当時の衣装を纏った地元住民により、教房が 1468 年に中村に到着したことを再現する行列も行われます。

川と共に働く

四万十川とその支流は、農業に適した環境を与えてくれます。中村では、周辺の水田をかんがいするための水車が江戸時代（1603–1867 年）に建設されて以来、革新的なかんがい技術が用いられてきました。いくつかの伝統的な水車は現在でも使用されていますが、ほとんどは近代的なポンプに取り替えられました。安並水車は、実際に動く実物大のレプリカ 15 基です。5 月下旬からは、水車近くで約 500 株のアジサイが花を咲かせます。